

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



カンボジアの子供たちと クライミングをする (3)

C孤児院の子供たちは僕らの前から一人一人消え、やがてクライミングを続けているのは4人だけになった。

翌年(2011年)1月30日、僕らはくだんのワークショップを開催した。その日、僕は酷い腰痛に悩まされながら、カンボジアでカンボジア人によるクライミングを今、ここからスタートします」と、高らかに宣

言した。その模様は国内主要TV5局によって、カンボジア全土に放映された。重鎮の祝辞のあと、信州・佐久のガイド君

の指導のもと、11歳の孤児、ロー(仮名)が5・10クラスをリードするデモンストレーションを披露した。そのムービーがYouTubeにアップロードされている。それを見て、あらかじめからロープで吊られて行われると思ひ込んでいたほとんどのカンボジア人は驚愕した。そしてまた、これが他の子供たちにも

火をつけた。この頃から、一般の中学生も孤児たちに混じってAW(人工壁)へ来るようになっていた。

2月のある日曜日、ローの9歳になる妹、ホリー(仮名)が、いつものクライミングを終えてC孤児院へ戻るとき、乗っていたトゥクトゥク(写真参照)か

ら転落した。頭を数針縫う怪我を負ったが、幸い大事には至らなかった。しかし事態を重く見たC孤児院は4月、孤児たちのクライミングを中止し、以後、再開することはしなかった。交通事故のリスクを混同してしまうと子供たちは何も出来なくなってしまう。分かりきったこととはいえ、そう言いたかつ



国道でホリー(9歳、仮名)が転落した乗り物と同じタイプのトゥクトゥク(実際に事故を起こしたトゥクトゥクはC孤児院自身が用意したもの)。写真の人物は、アンコールクライマーズネットのマネージャー兼トゥクトゥク・ドライバー(こちらが本業)のキムスロイ。



2009年9月頃、人工壁AWの出来る半年前、シソポンの岩場で初めてクライミングをする当時9歳のロー(仮名)。ロープを付けているのは僕。

た。一躍クライミングのスターになったローは、日頃から不安定で問題行動に走る兆候があったと聞いていた。クライミングがドロップアウトの歯止め

は間違いない。数人の関係者がそのことを気に掛けていたが、運営者は方針を変えなかった。ローも、やがてはラッタナヤツチェンのように、あのゲークな虚空に捉われてしまうのではな

いか。そのことがいつまでも僕の脳裏にしこりのように残った。何の計らいか、C孤児院と入れ替わるように、クライミングを始める子供たちがポツポツと増え始めていた。そこで、僕はそれぞれの保護者から、オウリスク(免責規定)の同意を求めて、家庭面談を開始することにした。しかし最初の面談で、僕らの担当者のひとりりが、母親からいきなり同意を拒否された。彼女はこう言ったのだ。アタシが怖いのはクライミングなんかじゃない、アンタだよ。そう聞いたとき、僕の目から大きなウロコが、氷河の崩壊を思わせる轟音とともに(大袈裟)落ちた。僕はクライミングが認められない世界に来たと思ひ込んでいた。でも、そうじゃない。認められていないのは、まず僕ら自身だったのだ。

(続く)